

---

# 魔法先生ネギま！～麻帆良騒乱物語～

イグニス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜麻帆良騒乱物語〜

### 【Nコード】

N9755Y

### 【作者名】

イグニス

### 【あらすじ】

時期外れの発光現象に伴い、9人のヒトが麻帆良へ降り立った。これは訪れた9人と英雄の息子、そして彼らを取り巻く人達の物語である。

## 1 時間目：やって来た者達（前書き）

と言う訳で以前活動報告に書きました『超絶駄問題作』の投稿です。  
当作品は『魔法先生ネギま!』の世界に、拙作から主人公一同4組  
を突っ込んだ無茶苦茶な二次創作です。

お読みになる前に必ず【小説情報】及び【タグ】をご確認の上、1  
%に満たない数値でも納得できない点がありましたら即座にブラ  
ウザバックをお願い致します。

## 1 時間目：やって来た者達

「これは……！」

彼は慌てていた。

年の割にやや老けた顔に驚愕の表情を張り付け、くわえていたタバコは地面へ落ちていている事も気付かぬほど慌てていた。

彼の名前は高畑・T・タカミチ。

ここ麻帆良学園都市にある中学校の教員で、生徒思い良い先生として知られている。

彼のモットーは冷静だが、今の彼に冷静さは欠片も無かった……目の前で起きている、今この瞬間には決して有り得ない現象が原因で。

「馬鹿な……この時期に世界樹が発光現象を起こすなんて……」

世界樹。

それはこの麻帆良学園都市の中心に聳え立つ、樹齢に換算すると200年はくだらないほど昔から存在する神木で……十数年に一度、大地と大気のエネルギー……いわゆる魔力により光を発し、発光現象と呼ばれる事象を起こす。

だが高畑教諭の言う通り、この世界樹の発光現象は……十数年に一度のスパンで起こっており、前回の発光がちょうど4年前……研究結果を元に言えば、最低でも向こう18年は発光現象を起こさないはずだった。

「…こうしちゃいられない、学園長に報告しないと」

言つて彼は、ようやく足元のタバコに気が付くと…それを踏み消して拾い上げ、スーツのポケットから取り出した携帯灰皿へねじ込み…足早に立ち去った。

後に彼は語る。  
タカミチ

『何故僕はあの時、自分で少しでも調べておこうと思わなかったのか』と。

同時刻、同町内某閉鎖空間内。

そこはリゾートと称しても過言ではないほどの景色を持つ、白砂が眩しい波打ち際。

周囲は全くの無人。

いや、遠景に見える白亜の城には住人が居るのかもしれないが。

―パシッ―

―パシパシッ―

そんな誰も居ない空間で突如、中空放電現象が発生。

―パシパシパシパシ…―

―バチバチバチバチバチ―

やがて放電現象はその規模を増し、空間に干渉を始める。

―ズズズズス―

―ゴゴゴゴゴ―

―シュバツ―

―ツズガガガガガアアンツ―

同時に何故か…青天の空にある太陽から世界樹から一条の光が放たれ、それまで空間放電現象を起こしていた場所に直撃…直後、激しい爆発音と共に夥しい砂煙を巻き起こした。

その爆発は波打ち際の砂浜に、半径4mのクレーターを作った。

「……ぐう、いててて」

「何よ、今のは…」

「……あれ？　ここどこだ？」

しばらくの後、砂煙が晴れたその場所には…それぞれが特徴的な格好をした、数人の男女が座り込んでいた。

「……ぬ、おい…大丈夫か？」

やがて彼等は、自分以外にもこの場所に人がいる事に気が付き…互いが互いの心配を始める。

「あ、ああ…すまん、頭がクラクラする以外は大丈夫だ…そっちは？」

「私も大丈夫…貴女は？」

「私も問題ないわ…よいしょっと」

衣服にかかった砂埃をパンパンと払いちつ、まず最初に立ち上がったのは長くてまっすぐな蒼い髪を持つ…グラビアアイドルが裸足で逃げ出すようなスタイルをした女性だった。

「で、ここはどこなの？」

「それが分かったら苦労しないって…おゝ、いて…雪蓮しえれんの一撃をモロに受けたみたいない感じだな」

次いで立ち上がったのは、身長180cmを超える長身に…全身に無数の傷跡を持つ、赤髪の青年。

「砂浜…か？ あつちに城みたいなんがあるけど」

「……現状把握より先に、自己紹介じゃねえか？」

次は黒髪で、左眼を縦に斬られたような傷跡を持つ…赤眼の青年。

「そだね…じゃあ自己紹介から始めましょうか」

黒髪赤眼の青年の言葉に賛同したのは、蒼髪の女性に負けず劣らずなスタイルをした…赤髪褐色肌の女性だった。

彼女の言葉を受けて、それまで沈黙を守っていた他の面々もゆつくりと立ち上がる。

「じゃあ俺からな…俺の名前は御鏡みかがみ 涼輔りょうすけ」

「私の名前は御鏡 綾子と申します…涼輔の義妹です」

左眼を上下に縫うような傷跡を持つ、黒髪赤眼の青年が御鏡涼輔。そのそばに立つ、黒髪蒼眼の巨乳美少女が御鏡綾子。

「んじゃ次は俺達だな…俺は姓を呂、名を堂、字を戦牙と言う」

「私は姓を徐、名を庶、字を元直と言います」

「私は姓が孫、名を堅、字を文台って言うの」

全身に傷跡を抱えた体を持つ、赤髪赤眼の青年が呂堂戦牙。その右脇腹に縋り付くように立つ、銀髪の美しい…ロリ魔乳の少女が徐庶元直。

そして徐庶とは逆の位置に、縋り付く訳ではないが威風堂々とした格好で立つ桃髪の巨乳美女が孫堅文台。

「……色々突っ込みたい名前が聞けたけど、次は僕達だね…僕は熱風 神也だ」

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー…長いからキュルケと呼んでちょうだい」

黒眼黒髪の、この中では一番身長の高い…大人しそうな少年が熱風 神也。

その神也をまるで宝物のように抱いて立つ、赤髪褐色肌の巨乳美女がキュルケ。

「私はルナティーア・ライントウーカー、私も長いからルナって呼んでね」

「私はセイラです」

蒼髪金眼でキュルケに匹敵する巨乳を持つのがルナ。  
その脇に立つ色白の、徐庶やキュルケを超える巨乳を持つ少女がセイラ。

全員が自己紹介を終えたが、場に残ったのは微妙な雰囲気だった。  
それはそうだろう…己以外の、ごく親しい者を除いた全員があり得ない格好をしたまま黙りこくっているならば。

互いが互いをこう思っただろう…『お前ら何処の仮装行列だ』と。

「…ねえ孫堅さん、いくつか質問してもいいですか？」

そんな中で口を開いたのは、キュルケに抱き上げられたままの少年…神也だった。

「えっと、シンヤ君…でいいのかな？」

「はい」

「ええ、どうぞ」

「孫堅さんは後漢時代、建業出身の武芸者で…孫策・孫権・孫尚香と言っ娘さんがおられませんか？」

「…えっ？」「」

神也の質問に反応したのはなぜか3人。

1人は言わずもがな質問を受けた孫堅本人だが、同時に涼輔が反応

した。

「孫策・孫權・孫尚香が娘？」

「って、ちょっと待て…それじゃ彼女は恋姫の？」

涼輔のリアクションに肯定の意を返す神也。

当然、置いて行かれた孫堅本人・徐庶・呂堂・キュルケ・ルナ・セイラの各人は頭にはてなマークを浮かべている。

「……いや待て、存在感アリアリでこの疑問が出て来なかった自分を恥じたい…神也、その…キュルケさんは……」

何かを思い出した様に言葉を紡ぐ涼輔。

その意図を汲み取った神也は、またもや肯定の意を返した。

「って事は神也自身がテンプレ？」

「ええ、テンプレです…事故型の」

「憑依じゃなくて？」

「はい、転生…から召喚と言う変則系ですが…それもチート仕様の」

「ちょっと待て、転生だって!？」

「どうかしましたか？ 呂堂さん」

少ない単語で会話を成立させていた神也と涼輔だったが、転生と言う単語に呂堂が食いついた。

「事故型のチート転生って事だよな？」

「です…スペック的には地上最強の生物を超えますが」

「オーガ超えとか…俺と一緒にだよ…」

「えっ!？」

呂堂の言い放った『俺と一緒に』と言う言葉に、今度は綾子が食いついた。

「それってどう言う…」

「俺もさ、事故死亡型のチート転生者なんだわ…本名を呂堂 刃<sup>じん</sup>つて言うんだ」

「うわ、完璧な日本名じゃないですか！」

「だから日本人なんだって！」

「ねえシンヤ、詳しくそうだから説明してもらっていい？ 話がさっぱりなのよ」

涼輔・神也・刃で盛り上がる最中、やや不満げな顔をしたルナが口をはさむ。

そしてルナの意見に激しく同意する綾子・孫堅・徐庶・キュルケ・セイラの5人。

「いや説明するにしても、神蓮<sup>しえんれん</sup>や蘭里<sup>らんり</sup>には理解できない…いわゆる

『天の言葉』が大盤振る舞いだろっからな」

「ふむ…なら裏技を使おうか……」

「裏技？」

「ああ、えっと…『汝の言葉を我に繋ぎたまえ』」

言って手を天に翳す涼輔。

直後、彼の手から黄緑色の光が玉となって出現…それが居合わせた全員を、ドームで包むような形になった。

その現象に言葉無くす、綾子以外の一同。

「涼輔さん、今の…」

「ああ、俺の居た世界の魔法だよ」

当の涼輔は何でもないと言わんばかりの態度だが、何故かルナは慌てている。

「ちょ、今の何て魔法なの！？ いきなり撃たれたから精神的魔法抵抗出来なかつたじゃない！」

「…ああ、慌てないでくれ…今のは俺の居た地方で使われていた『ボードレスワード万語解釈』って魔法で…この魔法が効いている間は、互いが話す全ての言葉が互いに全部理解できるようになる魔法さ」

言って涼輔は、今使った魔法の効果を説明する。

言語解釈が難しい種族間でも、互いが会話出来る様にする為の魔法だと言うとようやくルナは落ち着いた。

「なるほど…私の居た地方にあった古代魔法の『言語』<sup>ランゲージ</sup>って魔法と同効果な魔法なわけね？」

「恐らくな」

「…で？ その魔法とやらで裏技を使うって涼輔殿は言ってたけど…」

話を進めようとする孫堅。

そばにいる徐庶はどこからか竹製の巻物を取り出し、いつの間にか摺った墨を含ませた筆を準備している。

「まず大前提で言うんだが、今から話すのは実証された事実であって俺の狂言じゃない…頭ごなしに否定する事はしないでくれ」

「…ねえシンヤ、ミスタ・リョウスケの言ってる事…どこかで聞いたような言い回しなんだけど？」

「ああミス・キュルケ…いや、ミス・ツエルプストーか？」

「キュルケでいいわよ」

「んじゃキュルケ、俺の事は涼輔と呼んでくれ…さて、今言ったのはシンヤが実際に君に言った言葉なんだろう？」

「ええ」

「じゃあ事故死亡型異世界チートトリップの先輩である神也に語ってもらおうでしょうか」

「うわ、それってズルいですよ涼輔さん！」

言葉では涼輔を非難しつつ、それでも説明を始める神也。

彼には貧乳拒絶体質と言う極めて稀な体質があるのだが、居合わせた女性全員が平均以上の巨乳だった事もあって発症はしていないようだ。

神也は言った。

世界とは、自己が認識出来ていないだけでいくつも存在する。

世界には軸と言う物が定まっており、その軸を中心として様々な可能性で未来や過去が分岐した世界もある。

「正史と外史の関係か？」

「です」

刃の言う正史とは自身が認識し、知識として有している現状の世界。対して外史とは、その知識を元に可能性の数だけ枝分かれした…いわゆるパラレルワールドの事。

「僕が知る限り、そちらにいらっしゃる孫堅さんと徐庶さんは…人間が作り出した空想の世界の中だけの存在です」

「つまりそこに『ゼロの使い魔』の登場キャラである『キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー』さんが実在しているのと同義だ、と？」

「ええ、仰る通りですよ綾子さん」

世界は神と呼ばれる存在、あるいはその世界の管理者と呼ばれる存在によって管理されている。

この神ないし管理者は、自身が管理する世界の人間の想いを元にまた新たな世界を作る。

「想いを元に、新たな世界を？」

「ええ、例えば呂堂さんが『孫堅さんが老いるまで健康に生きる世界』と願えば、その世界の管理人はその想いを受け…孫堅さんが老衰以外では死なない可能性を實現出来る世界を構築します」

「そうして生まれたのが恋姫の世界、だと？」

「正しくは恋姫の外史、更に言えば今言ったのは可能性の1つに過ぎないんですが」

パソコンの前に陣取ったり、手にした携帯等で閲覧している小説やアニメ・映画と言ったモノは…そのモノに込められた多くの想いが管理人へ届き、そう言った世界を作る。

「けど、その世界が存在すればいいのにと願った本人は…よほどの事がない限り、その世界へ行く事はおろか…その世界を認識すら出来ません」

「そこで出てくるのが管理人の存在、っと」

管理人はその世界を管理する者。

世界を管理すると言う事は当然、その世界の魂も管理すると言う事。

「俺が聞いた話だと、その世界で管理できる魂の最大上限は世界毎に決まっています…神とか管理人は、その上限数の中で魂を回し…いわゆる輪廻転生をさせているそうだ」

「呂堂さんの仰る通りです…ただ、神とて完璧ではないのでミスを起こす事もありまして…そのミスにより、本来ならば正しく輪廻転生できる魂が…正しく輪廻転生できなくなる場合があるんです」

輪廻転生できなくなった魂はどうなるか、答えは消滅である。

消滅に至った魂は二度と輪廻転生する事が出来ず、結果としてその世界で稼動可能な魂の最大上限数を減らしてしまう事になる。

「輪廻転生できなくなる要因の最有力は、その人物に定められた寿命より速く死ぬ事」

「つまり…神の意志にそぐわぬ死を遂げた場合、って事？」

「理解が早くて助かります、ルナさん」

神・管理人じぶんたちの定めた意思スケジュールにそぐわず死んだ、魂となった者の存在は

…管理者側からすれば非常に拙い事である。

何故なら魂の消滅はその世界へ不調をきたし、最終的にその世界は崩壊するからだ。

「なので管理人はその崩壊を防ぐ為、その者が存在した軸と似たような条件を持ち…かつ、輪廻転生の輪の魂保有可能最大上限数に余裕のある世界へその魂を送り込み…その者が死んだあとの世界へ調整をかけるんです」

「どういう事？」

「例えば、想定外となった死因が『誤って毒キノコを食べた事による中毒死』だとしましょう…なら送り込まれた先の外史では、その者が毒キノコで中毒死する可能性が極限にまで減らされた世界だ…と言う事です」

ただこうして、送り込む世界がある魂なら事態は良い方だが…最悪の場合、条件に適合しないと言う事態もある。

例えばさっきの例で言うならば、条件的には主軸とした世界とほんのわずかな差しかないが…いずれの世界でも毒キノコによる中毒死と言う可能性を下げる事が出来ない世界しかないなど。

「そう言った場合に取られる緊急措置こそ、僕や呂堂さんが経験した『異世界転生』と言う訳です」

その者が主軸とした世界とは、世界観が全く異なる世界へ魂を送り込む荒業。

当然その世界とは元来の性質が合わない為、迂闊に送り込めばあっという間に死んで魂の状態へ戻り…元の世界が調整出来ていないため、結局は消滅…最終的には主軸となった世界はおるか、緊急措置として送り込んだ世界をも崩壊させてしまう要因となる。

「だから管理人は、その予期せぬ死を迎え…異世界へ送り込むと決めた魂を、管理人権限で強化するんです」

「魂の強化…」

「ええ、送り込まれる世界が戦乱の最中にある世界なら武力や体を

強化して才能を与え…送り込まれる世界に魔法があるなら、魔法に対し適性を高めておく…こうすれば送り込まれた先の世界で適性を得る事が出来、その世界での予期せぬ死亡を阻止…ひいては主軸となった世界の調整にかける時間を得る事が出来、最終的には2つの世界を救う事になるんです」

「ただこの、与えられた才能や適性が…常人には到底成しえない域に達している事が多い事から…魂強化型転生者を『なんら鍛練せず、楽して最高峰の力や能力を得たズルい者』と言う意味をチートと呼ぶんだ」

刃の端的な説明に納得顔の女性陣。

どうやらチートと言う横文字も、後漢時代出身である孫堅や徐庶にも『ポータレスワード万語解釈』の効果でしっかり理解できているようだ。

ここまでの講義を竹の巻物へ書き留める徐庶を見ながら、神也はそう言った。

男性陣は全員が近代日本出身の為に理解しているが、女性陣は出身年代はおろか世界までもが違う為に理解の進捗は芳しくないらしい。

「さてここままで質問はあるかな？」

やがて神也がそう言った時、それまで口を開かなかったセイラが拳手をした。

「そのチートとテンプレってどう関係があるの？」

「うん、それはこれから」

さて、想いを元にした世界が存在すると言うのは先述の通り。

だがその世界の根本構造…言わば脚本を作るのは一個人であり、それを別視点で見るのもまた一個人であるゆえに見解の相違が起こる。

「例えば、C氏が書いた脚本を読んだA氏が『あの時あそこでアイツが何々をしていればよかったのに』と言えば当然B氏から『いやアイツはあそこで何々をすべきじゃないんだ』と言う意見も出る」

このB氏が、C氏の書いた脚本の当該部分を認めず…その部分を、B氏にとって都合の良い形式に改ざんした脚本を書き…B氏改編の新脚本【C'】<sup>シートダッシュ</sup>が出来る。

C'を自分で読んだB氏は当然その出来に納得するが、今度はD氏がその脚本じゃダメだと言い…今度はC'を改編し【C''】<sup>シートダッシュ</sup>を書き上げる。

「こうして、捉える者が一個人であるが故に原本となった『C'』<sup>シートダッシュ</sup>は無数の改編本を生み出すんだけど…長い目で見れば結局はある程度の枠組みに収まってる事が多いんだ」

「ある程度の枠組み？」

「…例えば『ゼロの使い魔』と言う物語を基本構造にする場合、そこから生まれるC'は改編者の意図が加わった物となっているんだけど…多くの場合、自身にコンプレックスを持つ改編者自身が…コンプレックスの無い自分、つまり『もし自分が並ぶ者の存在しない最強の存在だったら』と言う妄想的存在を作り、それをルイズに召喚させる…となる改編本が出来る」

「分かりやすい補足ありがとう涼輔さん…そう、この『最強と設定

した空想の自分を貧乳に召喚させて』と言う設定をテンプレート、  
雛形って意味の言葉を略してテンプレって言うんだ」

「『最強となった自分がもし、この世界に行けたら』と言うテンプレを元にして『最強』つまりチートな存在が生まれるんだ」

もちろんその『最強となった自分』が存在する世界はC、<sup>シールドッシュ</sup>なので、  
どれだけ改編しても原作にはまるで影響を及ぼさない。

例えば主要登場人物全員を抹殺し、その世界で暴君となろうが…ヒロインを主人公から取り上げて、理想のハーレムを作ろうが…原作にはなんら影響はない。

「……………／／／」

「…何か思う所があつて挙動不審な呂堂さんはさておき、このテンプレートキャラ…テンプレ設定が無ければ、何かと同じだって事に気付けると思うんだけど…」

「……………あ、もしかしてさっき言つてた『魂強化型転生者』の事？」

「正解」

とある正史を軸とした外史…仮称『Y軸外史』に、誰かの想いが反映された雛形世界…仮称『Z要素含有のY軸外史』が出来た。

後に時間を経た別世界…仮称『X軸正史』で、輪廻転生出来ない魂が出た。

緊急措置として、同じX軸に存在する別の外史…仮称『X軸外史』に転生させたいが、X軸外史は既に魂が飽和間近。

ならばY軸外史へ行つてもらうが、Y軸外史は危険なので魂を強化して行つてもらおう。

あ、でも予定のY軸外史には魂の保有上限数に余裕が無い…ならばZ要素含有のY軸外史へ。

「…と、こう言う事ですか？」

「うん、その通り…と、少し休憩しようか…ずっと喋ってたせいで喉乾いたよ」

「ねえシンヤ、アタシのおっぱいで良けれ…」

「キュルケさん？」

「…はあい、夜まで我慢するわ」

休憩の為に水分を補給しようとした神也に対し、自身と神也以外に8人の他人が居る中…平然と爆弾発言をするキュルケ。

そんなキュルケを諷める神也だったが、どうやらキュルケ本人には大した効果をもたらしていないらしい。

「……はあ、錬金…コンデンセーション…念力」

言って神也はキュルケに抱き上げられたまま、呪文を2つ唱えた。

前者は精神力を糧に、その場に存在する無機物を別の無機物へ変える呪文。

神也は自身達が今立っている砂浜の砂を原料に、その砂を9つのガラスのコップへ変えた。

中者は大気中の水分を一か所に集める魔法で、神也はこの魔法で空

氣中に大きな水球を作り出した。

それを後者の魔法…手で触れていない物体を自由自在に動かす魔法で9等分し、9等分した水球を錬金で作ったコップへそそぐ。

「へえ…凄いな、これがゼロ魔の…ハルケギニア式魔法なのか」

「ええ、ただ余りに便利すぎるのでハルケギニアの魔法使い…メイジは、その多くが運動不足で…軍人以外は軒並み虚弱なんですよ…  
…はい、どうぞ召し上げれ」

神也の言葉で他の全員がコップを手に取り、中の水を一気に飲み干した。

皆一様に微妙な表情だ。

当然と言えば当然か…魔法で作った水は、正直言つて白湯…湯冷ましの水より不味いからだ。

喉の渴きを潤した神也は、最後に自身のハルケギニア経験を端的に説明し…もう1回、コンデンセーションと念力で水を飲んだ。

そして再び説明開始…今度は魔法についてだった。

魔法…妖術と捉えていた孫堅は、説明を聞いて凄まじいまでの納得具合を示した。

「さて…テンプレとチート、転生者…及び魔法については大方お話ししたんですが…それだと僕たちがここに居る理由が説明できないんですよね」

1人1人表情を確認するように一同の顔を見る神也。

「使い魔を召喚する儀式…サモン・サーヴァントで神也がハルケギ

ニアへ行つたのは分かつたわ」

「けどそれだとこの世界へ移動する理由が無いんですよ？」

「そうね…私やセイラまで呼ばれる理由が分からないし」

涼輔・綾子はラグナロクの世界から。

刃・孫堅・徐庶は恋姫無双の世界から。

神也・キュルケはゼロの使い魔の世界から。

ルナ・セイラはエクスペリアの世界から。

それぞれでは面識のある人間もいるが、無い人間もいる。

「……………うん……………」

とりあえずこれからどうするか…そんな思案にふける9人だったが、それは突如現れた10人目の声によって中断せざるを得なくなった。

「貴様ら、どうやってここへ来た？」

## 2 時間目：来訪者と闇の福音（前書き）

相変わらず無茶苦茶な内容だな…我ながら。

## 2 時間目：来訪者と闇の福音

「貴様ら、どうやってここへ来た？」

現れたのは、膝まで伸ばした長い金髪を持つ美少女。

だが発する威圧感はとてもではないが、その見た目にぞくわない強大な物。

「ここが私の別荘だと知って入り込んだのか？」

言葉を発する度、爆発的に膨れ上がる威圧的。

コメカミの辺りにうつすらと青筋が浮いているのを見る限り、少女は大変ご立腹のようだ。

そんな少女が放つ桁違いな威圧感に対し、即座に我が身の闘気を解放：瞬間に全力戦闘行為が可能な、涼輔・綾子・刃・孫堅・神也・ルナが臨戦態勢に入った。

「……………あれ？」

そんな中、腰に挿した直剣の柄を握っていた神也が：少女の顔を直視し、首を傾げた。

「……………あの、この場においてこんな事を聞くのは場違いかと思つてますが：もしかして、エヴァンジェリンさんでいらっしゃいますか？」

「……………え？」

神也の発言に日本出身の男全員が食い付いた。

「エヴァンジェリンって…『ネギま』の？ 懸賞金600万ドルの、  
ハイ・デライトウォーカー  
真祖の吸血鬼だよな？」

「ダーク・エヴァンジェル闇の福音』とか『ドール・マスター人形使い』…他にも『マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使い』『あ悪  
しきおとすれしき音信』『かいんのしと禍音の使徒』『わらべすがたのやみのまおう童姿の闇の魔王』とかって呼ばれてる…  
あの？」

涼輔・刃の言葉に頷く神也。

「さっき彼女は『私の別荘』と言いました…加えてあの身なりと威  
ツシャー圧感、更にはこの場所の風景…彼女がエヴァンジェリンさんで、こ  
こが麻帆良の…エヴァンジェリンさんの自宅にある『別荘内』であ  
るなら、ここが『魔法先生ネギま！』の世界である事で全てに納得  
が行きます」

そう言った次の瞬間、金髪の少女から威圧感が霧散し…代わりに嬉  
しそうな表情が出てきた。

「ほう？ 私が『ハイ・デライトウォーカー真祖の吸血鬼』だと知っているのか？」

「…ええ」

「ならば話は早いな…私の名はエヴァンジェリン・A・K・マグダ  
アナタシオティ  
ウェル…貴様らが知る通り、懸賞金600万の吸血鬼…ここは麻帆  
良にある私の家にある別荘、正式名称『ダイオラ魔法球』の中だ  
よ」

エヴァンジェリンの説明を聞き、やっぱりかとガックリうなだれる

神也。

エヴァンジェリン。

アナタシオティ

ミドルネームのA・Kは不死の子猫の意。

見た目は10歳くらいの女の子だが、その正体は吸血鬼の真祖（ネ

ムンドウス・マギクス

ハイ・デイトライトウオーカー

ギまの魔法世界の最強種のひとつ）であり、老練の魔法使いである。生まれは百年戦争の頃（1337年～1457年）と説明されており、ネギまの作品内時間は西暦2003年となっているので人間換算だと600歳前後。

元々は普通の人間であつたが、10歳の誕生日に目覚めたときに吸血鬼となつていたことを知る。自分を吸血鬼化させた人物に復讐を果たした後、数百年もの間生きながらえてきたが、人間の世界はもとより、魔法使いの国でも受け入れられなかったため、当時、暗黒大陸と呼ばれたアフリカや、南海の孤島で一人で暮らしたこともあつた。

生き延びる為に現在までの過程で大勢の人間を殺しており、自らを「悪の魔法使い」と呼んでいる。

半ば自分自身でその呼称を面白がつて（冗談まじりに）好んで用いているが『少なくとも、最初の一人は憎しみをもつて殺した』と語っているように、自戒的な意味合いでも用いている節がある。

これは生来の純粹さから来る偽悪的な性格の現れとも言える。

エヴァンジェリンの名は魔法界において恐怖の対象となっており、600万ドルの賞金首となっていた。

また、寝ない子を大人が「闇の福音」がさらにくるぞ」と脅かすなど「なまはげのような扱い」を受けている。

得意属性は闇と氷、また人形使いとして糸を操る『操糸術』<sup>そつじゆつ</sup>や封印時の対抗策として得た合気柔術にも長ける。

「さて、私自身の紹介は済んだ…次は貴様らの番だ」

言って再び威圧感を発し始めるエヴァンジェリン。

そんなエヴァンジェリンに対し、神也は立ち上がり…神也を筆頭に9人が同時に頭を下げた。

「えっと…まずはすみません、エヴァンジェリンさん…僕達がここにいるのは、自分達にも理由が分からないんです」

「何？」

「エヴァンジェリンさんにも納得が行くよう説明するならば…原因不明の転移魔法が発生、それに巻き込まれたのではないかと…」

言ってこれまでの経緯を説明する9人。

自己紹介を兼ねた説明は、別荘内の風景が夕暮れになるまで至った。

「…随分と濃い面々だな」

「それは…その……」

「まあそれは良い…と言う事はだ、貴様らは『正義の魔法使い』<sup>マキシテル・マキ</sup>では無く…本来ならば絶対に関わらない、魔法世界とも違う別世界の人間だ…と言うのだな？ ……ふむ、なるほど…それならば、ふざけた話だが…起これらと言う保証も無いな」

「納得出来ました?」

「まあ仕方無かろう…今日は朝から世界樹の様子がおかしいし、その余波だと考えるのが良さそうだ」

そう言つて再び、威圧感を引つ込めたエヴァンジェリン。

「良かった…例え階級が違えども、同族殺しはしたく無かつたから」

言つて安堵の息を吐くのはルナ。

彼女<sup>ヴァンパイア</sup>は吸血鬼<sup>インキュバス</sup>と男性型夢魔のハーフで…祖先は違えども、エヴァンジェリンとは同族にあたる。

「俺も、ダチの嫁さん<sup>ヴァンパイア</sup>が吸血鬼だからな…アンタとは戦いたく無かつたんだ」

そう呟いた涼輔は苦笑いを浮かべている。

「しかし同時多発次元跳躍か…珍しい事もあつたもんだ」

「あ…あの、エヴァンジェリンさん?」

「ああ、長いならエヴァと呼んで構わんぞ…口調も楽な物にしている」

「ならエヴァ、いくつか聞きたいんだけど…アナタ、今…呪いを受けてるか、封印指定になつてない?」

「……何?」

綾子の発言に食い付いたエヴァ。

「分かるのか？」

「何て言うのかしら…感じられる魔力が、こう…幾重にも重ねて巻かれた、包帯の隙間から滲み出ている感じなのよ」

そんな綾子の表現に対し、エヴァは表情を陰らせた。  
それ即ち肯定。

エヴァは話し始めた。

十数年前、エヴァは…当時、△ンドゥス・マギクス魔法世界で名を馳せていた『ナギ・スプリングフィールド』に危機を救われ、以来彼を追いつけていた。

しかし、悪事をやめさせる為ナギに『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』の呪いを掛けられ、麻帆良学園に封印されてしまう。

ナギの魔力は強大で（力任せに術を使ったためでもあるが）誰もがその呪いを解くことができず…またナギ本人も失踪してしまった為、15年間学園に女生徒として登校し続けることになる。

「私がこの『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』と言うふざけた呪いにかけられてこの地に縛られ、もう15年になる…私にこの呪いをかけたナギは、3年経ったら解いてやると言っていたが…今となつては10年前に死んだと言っ噂すらある」

それを聞いた神也は、涼輔・刃と自身を除く6人に事のあらましを説明した。

「ねえシンヤ、何とかならないの？」

神也を使い魔とし、かつ伴侶として得たキュルケは…故郷の親友と似たエヴァの境遇に歯噛みした。

「……僕だけでは難しいですね…何せ相手は『千の呪文の男』サウザントマスターと呼ばれる至る、アホみたいな魔力を持つ魔法使いの呪い…いくら僕が新型虚無だとは言え、力任せに編まれた5重封印術式を…エヴァさんに被害無く解くのは至難の技ですよ」

神也は『ゼロの使い魔』の世界に、キュルケの使い魔として地球から召還され…様々な事象を経てキュルケと結ばれ、同時に4人居る伝説の魔法使いの1人とされた。

「お義兄様…」

勇者として国に縛られた経験のある綾子も、自身から望んで余所へ行く事の出来ぬエヴァを不憫に思ったようだ。

「……エヴァが受けている呪いを、視覚化出来るなら何とか出来るかも知れんが…」

綾子の血の繋がらぬ兄である涼輔は、綾子より早い段階で同じく地球から異世界『ラグナロク』へ魔王として召還された経歴を持ち…類い希なる剣術の腕を有する、ラグナロクで初となる魔法をいくつかも編み出した凄腕の魔法剣士だ。

「あら、魔法や呪いの類を視覚化出来れば良いの？」

視覚化出来ればと言う涼輔に対し、にこやかな笑顔でさも『私なら』  
と言うのはルナ。

ルナは先述の通り魔族を親に持つ、ハーフとは言え生粋の魔族で…  
早くに亡くなった両親に代わり自身を育てた、育ての親の教育の甲斐あって故郷『エクスペリア』では、比肩する者の少ない魔法使いである。

「何か手があるのか？ ルナ」

「ええ、本人の血が媒介に出来るなら…ここにいる全員に、私の魔力で視覚化出来るわよ？」

言ってルナはその豊かな乳房の谷間に手を差し入れ、そこから真っ白な牙状の何かを1つ取り出した。

「これは『領域拡散』<sup>エリアスプレッド</sup>って言う、私の牙を主原料にした魔法装身具<sup>エンチャント</sup>…まあマジックアイテムね？ これにステータス異常を受けてる人の血を吸わせると、その人の状態異常が他人に見えるようになるのよ…エヴァ、ゴメンね？」

「ッ…」

言ってルナはエヴァの手を取り、その『領域拡散』<sup>エリアスプレッド</sup>の先端でエヴァの指先を引っ掻くようにして傷を付け…じわっと滲み出た血を、手にしている『領域拡散』<sup>エリアスプレッド</sup>に吸わせる。

するとエヴァの体に、それまでは無かった太い鎖が巻き付いたよう

に見え始めた。

「これが今、エヴァの体を蝕んでいる呪いよ」

「うへえ…ムチャクチャ太いな」

「太さは込められた魔力の強さに比例するわ」

「こりや俺の『神断緋刃』かんだちのひじんでも難しいぞ」

「私の『小烏丸天国』こがらすまるあまくにじゃ齒がたちませんね」

「僕のエクスカリバーでも不可能です…もっと、武器自体にパワーのある武器じゃないと」

綾子を持つ刀は大業物に分類され、その切れ味は鉄などは豆腐を斬るような手応えになるほど絶大。

だが呪いと言う形で魔力を斬るには不向きで、ましてやそれがここまで太い…込められた魔力が多い、イコール硬いだと難しい。

涼輔の刀は綾子のそれを上回る切れ味と硬度を持つ剛刀だが…それでも刀なので、こう言った呪いものを斬るには向かない。

また神也が持つエクスカリバーも、切れ味で言うなら綾子や涼輔の刀に追隨する性能を秘めるが…やはり硬すぎる物を斬る事は出来ない。

「…なら俺の飛刃赤戟ひじんせきぎなら斬れるか？」

言って刃は背負っていた薙刀を取り出した。

刃は輪廻転生により、恋姫無双の世界に生を受けた武将。  
振るう得物は刃の剛力も物ともせず、岩や鉄は愚か敵を…武器と鎧  
と馬ごと両断出来る剛性を備えている。

そんな刃の得物を見て、神也は歓喜の声を上げた。

「この形状は…方天画戟じゃないですか！ イケます、これならイケます！！ 涼輔さん、綾子さん！ 刃さんの武器に魔力を流し込んで下さい！」

「よし！」

「任せて下さい！」

神也の指示で涼輔と綾子の両名が刃の両側に立ち、突き出した手から刃の飛刃赤戟へ魔力を流し込んで行く。

涼輔と綾子の魔力を受け、飛刃赤戟の穂先が赤紫色の光を帯びる。

「デスperl、魔法効果付与！ エンチャント 対象、飛刃赤戟！」

言って神也がエクスカリバーを振るうと、その切っ先から光の球が飛び出し…飛刃赤戟の穂先に集う、赤紫の魔力光ごと包むベールのような形に安定する。

「刃さん、エヴァさんの頭上…魔力鎖が球のようになっているのが見えますか？」

「ああ、何とか」

「それを斬って下さい」

「しゃ……うおおおおあつ！」

—ガギンツ—

神也の指示で刃が飛刃赤戟を振るうと、硬い金属同士を打ち付けたような音が別荘内に木霊する。

やがて…

—ビシッ—！

—ビキビキビキ—

—バリィンツ！—

分厚いガラスにヒビが入り、そして砕けたような音がし……綾子の眼に見えていた、鎖の塊が爆散した。

—ゴウッ—

同時にエヴァの体から発せられる、初見の時とは比べ物にならないほどの威圧感。

[illegible]

その魔力に冷や汗を流す綾子。

今のエヴァから発せられている魔力は、ヴァンデル魔神形態となった…全力状態の涼輔と同じくらい強い。

同時にキュルケも冷や汗を流していた。

今のエヴァが発する威圧感は、神也が竜化して殲滅戦を行う時のそれだからだ。

ただ、それ以外の面々はやはりアクションが違った。

「凄まじい覇気ね…狂化した雪蓮とか、本気状態の春蘭しゅらんとどっちが強いかしら」

「魔法と言う、未だに理解の及ばない力を駆使するエヴァさん…見たところ遠距離仕様なので、近接格闘に持ち込めば旦那様でもあるいは…」

これは孫堅と徐庶。

徐庶の言う旦那様とは刃の事である。

「私を纏ったマスターがこんな感じなのでしょう…ああ、早くマスターと一つになりたい／＼」

これはセイラ。

ちなみに彼女の言う『マスター』とは言うまでもなくルナの事。

ルナは両性具有者で、特殊な魔法を使う事により…性行為を伴ってセイラを鎧として纏う事が出来る。

なので『一つになりたい』は、性行為そのものかあるいは自身を鎧化して纏う事に他ならない。

…万年発情期とは言わないであげてほしい。

「つか魔力は…あれ？…もしかして、学園結界も斬っちゃった？」

「みたいです…正確には学園結界が“エヴァさんに作用していた部分のみ”ですが…」

冷や汗を流す綾子・キュルケや、全く別の思考に耽る孫堅・徐庶・セイラとは違い…自身達が、すっかりミスを犯した事を悟る涼輔・刃・神也。

実はエヴァはその強大な魔力を【学園結界】により封じられており、これが第三要因によって無力化…あるいは減衰した場合、本人をして『登校地獄と学園結界から抜け出せば反則気味の最強状態』と語るほどの力を発揮する。

ちなみにこの【学園結界】は、ナギの【登校地獄】インフェルナス・スコラスティクスの後に効力を発揮している。

「よし、景気付けだ…貴様らにこの世界の魔法を見せてやる…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!」

そうとは知らないエヴァは嬉々として魔法の詠唱を開始…突きだし、た右手に魔力が凝縮されていく。

「氷の精霊17頭、集い来りて敵を切り裂け! 魔法の射手! 連弾・氷の17矢!」

撃ち出された水色の矢は、別荘内にある海へと高速で飛び立ち…着水と同時にその周囲を氷河のようにバキバキと凍らせてしまう。

「うむ、やはり私はこうでなくては…礼を言うぞ、涼輔、綾子…ルナ、刃…そして神也よ」

完全快調となったエヴァはにこやかな笑顔で涼輔達の手を握って行く…が。

「っあ！ あふう……」

エヴァが神也の手を握った瞬間だった。

神也は突然真っ青になり、口から泡を吹いて卒倒した。

「え？」

「おい神也！ ……気絶してるぞ？」

「……あ、あゝあ……場の雰囲気の流れがあんまりにも自然だったから、神也の体質を失念してたわ」

言って倒れた神也を抱きかかえ、その豊かな胸へ抱き込むキユルケ。すると神也は気絶しているにも関わらずキユルケにしがみ付き、その両手でキユルケの巨乳を揉み……ブラウスの谷間へ顔を押し付け、そのまま動かなくなった。

「……何だったんだ？ と言うより神也に何があった？」

「先に、本人に代わって謝っておくわねエヴァ……シンヤは、貧乳に對して拒絶反応を起こす体質なの」

「……何だと！？」

「胸の起伏が少ない女の子が、自分から半径3メートル……違った、半径3メートルに近づくとは発作が起きる……距離3メートルで鳥肌、2メートルで震え……1メートルで顔面蒼白、0メートル……接触で気絶よ」

「なら神也は、私が握手をしたから……？ いやそれだと他の連中は

…」

言ってエヴァは周囲を見渡した。

綾子・孫堅・徐庶・ルナ・セイラ…そしてキュルケ自身。

—ぷるんぷるん—

—ゆっさゆっさ—

—ぼいんぼいん—

みな、いずれ劣らぬ巨乳の持ち主だった。

「……………」

—さすさす—

そして自身の胸を撫でさすり、たつぷり20秒は考えた後…

「ば、ばば…ばばば…馬鹿にしているのかあああああああああ  
あああつー！」

怒号と共に爆発した。

その怒り具合は、初邂逅当時に見た比ではない。

顔はゆでだこの様に赤く…浮き出した青筋はミミズほどの太さとな  
っており、浮き出た場所もコメカミだけではなく額にも及んでいる。

「別にふざけてる訳じゃなくて、これはシンヤの心の問題で…初恋  
の相手が偽巨乳で、失恋と同時にこうなったらしいの」

「そりゃあ、なあ…？」

「初恋の相手が偽巨乳なら、分かん気がせんでもないな…」

キュルケの台詞に納得する刃と涼輔。

その台詞に対し、セイラとキュルケを除く他の女性陣は苦笑している。

「どいつもこいつも私を幼女だツルペタだと、あまつさえエターナルロリだ合法ロリだロリババアだと好き放題抜かししやがって……」

さぞ悔しげな顔で地団駄を踏むエヴァ。

「ああクソツ！ 忌々しい…この体が真祖でなければ今頃はムチムチの美女となっているものの…うがあああああつ！ 『魔法の射手！ 連弾・氷の6999矢』…！」

叫び、空に向かって『魔法の射手』<sup>サギタ・マギカ</sup>を連射するエヴァ。

それは全弾が海へ、そして既に氷結している部分へ着弾…海上に巨大な、ムチムチ美女の精巧なオブジェクトを形成していく。

その美女像は綾子と孫堅と徐庶とルナとセイラとキュルケを、足して6で割った様な…それでも巨乳の美女だった。

「貧乳は、ステータスなんだああああああつ！ 『魔法の射手！ 集束・闇の1矢』…！！！」

叫びと共に放たれた『魔法の射手』<sup>サギタ・マギカ</sup>はこれまでと違い黒色。

それは美女の氷像の胸にささり、盛大な爆発を起こした。

氷像は木端微塵となり、砕けた氷片がザバザバと海へ降り注ぐ…

「……………」

その鬼気迫る表情のエヴァに対し、相変わらず苦笑いの表情を崩せない女性陣と…複雑な表情をした男性陣であった。

「ちつくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおっ！！！！！」

陽も落ちた別荘内の海岸で、エヴァの魂の叫びが木霊した。

## 2 時間目：来訪者と闇の福音（後書き）

これ以降、当拙作では『ネギま式魔法』の【口頭発声詠唱文】にルビはふらずに進行しますのでよろしくお願い致します。

### 3 時間目：解き放たれし闇の福音（前書き）

テンプレ『エヴァ 解放』を適用しました。

### 3 時間目：解き放たれし闇の福音

ひとしきり暴れ回ったエヴァだったが、やがてMP…麻帆良の魔法使いが言う魔力が尽きたようだ。

「はあ、はあ、はあ…」

肩で息をするエヴァを、生温かい視線で見詰める涼輔達一行。  
やがて目を血走らせたエヴァがこちらを振り返り…

「お前ら…特に神也！ これで文句は無いだろっ！」

そう言つて…どこからか取り出した、試験管に入った液体を飲み干し…涼輔達一行の眼前で、同性も羨むような美女の姿になった。

「……」

だが当の神也はキュルケの胸に抱かれて、未だに気絶しており…涼輔達に至つては全員が『一言でも文句を言っただろうか、俺達は…』と言つ心境だった。

「…チッ」

そんな神也を見てエヴァは舌打ちを1つ…やがて空を仰ぎ見てこう言つた。

「ああ、もうこんな時間か…今日は泊まって行くが良い、夕食ぐらいは出してやる」

エヴァの説明によるとダイオラマ魔法球内は、所持者の都合によって球内時間と外界時間にズレを生じさせる事が可能で…エヴァの別荘では24時間経過して、ようやく外界の1時間に相当し…1度中に入ると内部時間で24時間経過しなければ出る事が出来ないと言う。

またエヴァはこうも言った。

ダイオラマ魔法球は、水晶やボトルシップの類に…イメージを伴う魔力で風景を創造するか、魔力で実物の風景を空間ごと切り取って封入するかによって作られ…エヴァの別荘の場合は後者の製作法を用いており、賞金首だった同時の居城『レーベンスシュルト城』を中心に…南国リゾート風の景観を造り上げたそうだ。

「美味しいな」

「ああ、フライドチキンにはうるさい俺でも文句の付けようがない」

「へえ…漢人の私達でも、美味しく食べられるように作ってくれたのね？」

「ちょっとコレ…ハルケギニアなら店に出せるわよ？」

そんなレーベンスシュルト城に案内された一同は、エヴァ自らが作製を手掛けた人形達…通称『チャチャシリーズ』が作った豪華な料理に舌鼓を打っていた。

「まあ私の舌を唸らせるだけの料理を作れるように造ったからな…この程度は造作もない」

「この出来で“この程度”か…曹操辺りが聞いたら卒倒するだろうな」

「曹操…三国志の英傑の1人で、刃達が居た世界では覇道を歩む事を決意した女だったか？」

「ああ」

食事中にする話として、彼等は自身のこれまでの経緯を…さつき行った自己紹介の時より、殊更詳しく話した。

「なるほど、部下は駒か」

「覇道を歩むと言うならそれも仕方ないと思うが、俺には俺の正義が有ってな…折り合う事が出来なかったのさ」

「自身の正義か…分かる気がするよ」

「ほう？ 涼輔にも自分の正義があるのか？」

「もちろん…俺の正義は『家族と認めた者は、守れるならばどんな手段を使っても守る』それと『権力や立場…血統とかをかさに着て、他人を虐げるやつは許さない』だ」

涼輔は地球の、それも日本から異世界『ラグナロク』へ…魔族の王として召還された。

新人の王として動き始めた涼輔だったが、その道のりは地球人…更に言えば一般男子高校生には、苦難の連続だった。

その途中、自身と義妹が…種族は違うが同じ魔族である事が発覚した。

「ある時、ダチの計らいでとある夜会に参加したんだが…そこで、ダチの国の腐れ貴族がダチの嫁と俺の家族を貶してね…思わずブチ切れちゃってさ」

「ああ、吸血鬼ヴァンパイアの嫁を持つと言う友人か？」

「ああ」

「貶された家族とは？」

「余り言いたくは無いが…奴隷の出でさ」

「……なるほど」

涼輔の言葉に含まれた真意を悟ったのか、エヴァはそれ以上何も言わず…グラスに注がれたワインを飲み干した。

「にしても涼輔が魔族…ね」

「森羅万象の精霊を束ねる、精霊の…そして魔族の王、魔神ヴァンデル…知った時は俺もビックリだったよ」

「ルナも魔族だったな？」

「ええ、私は吸血鬼ヴァンパイアと男性型夢魔インキュバスのハイクオリティーハーフ…それが私」

糧として襲われた吸血鬼ヴァンパイアと、捕食者たる男性型夢魔インキュバスがなぜか恋に落ち…誕生したルナ。

両親の身体的特徴を強く受け継いだルナは両性具有となり、それが元で故郷を追いつき着いた先で1頭の竜を助ける。その龍こそセイラの母竜だった。

「両性具有？ フタナリってやつか？」

「ええ…私は産みの母から『女として最上級の美貌』と、吸血鬼ヴァンパイアの能力として『吸血』『吸血隷属化』『蝙蝠化』『蝙蝠使役』『翼の発現と飛行能力』『幻術魔法』『強大な魔力』を受け継いだ…そして父から男性型夢魔インキュバスの能力として『女殺しの巨根』『想像を絶する（射）精力』『夢侵入』『夢の操作』『日光耐性』『流水耐性』『銀耐性』『ニンニク耐性』『強靱な肉体』『魅了魔法』を受け継いだ…加えて育ての母から『生きる為の技術』『両親から受け継いだ能力の使用方法』『魔法の技術』『魔法を用いた知識の利用法』『魔法具の扱い方』『雷属性魔法』『竜に対する知識』『女の扱い方』等を授けてもらい、娘である『セイラ』を従者として得た」

こうして十二分にチートと化し、数年が経ったある時…ルナはその種族を『吸精夢魔姫ヴァンパイアキュバス』の初代であるとされた。

「なっ、吸精夢魔姫だと！？ 不死族の中でも最強最上位に位置する、真祖の吸血鬼と並ぶ魔法世界六大最強種の一角ではないか！ いや待て…涼輔が魔神で、その義妹の綾子が高位精霊ハイスピリット…ルナが吸精夢魔姫ヴァンパイアキュバス、その従者であるセイラが魔法竜マキドラゴン…神也が竜人で私が真祖の吸血鬼イトウォーカー…ははっ、何という事だ！ 魔法世界六大最強種が一同に会しているとはな！」

それぞれ出身世界こそ違うものの、種族的にはエヴァの言う通り『魔法世界六大最強種』の一角を担う存在。彼等を1人でも取り込めば、その力を以て魔法世界なら一部だけで

も掌握：現世界でも一国は容易に落とせる。

ましてや純粋な人間である刃・孫堅は万からなる歩兵・騎兵を討ち屠れる三國無双の武人。

加えて徐庶はその刃や孫堅の傍にあつてなお、武も智も振るえる稀代の文武官。

また、澄ました顔でワインを飲みつつ『私は関係ないわよ』と言つた顔をしているキュルケだって、その身に凄まじいほどの魔力を有した火属性超特化型の魔法使いだ。<sup>メイジ</sup>

この10人を敵に回して、無事で済むはずがない。

「ところでエヴァ」

「む？ 何だ、涼輔」

「実を言えば、さっきやつた『<sup>インフェルヌス・スコラスティクス</sup>登校地獄』の解除だけど… 思わぬ誤差が生じたんだ」

「…何？」

ちなみに視界の端では、刃とルナがナニのNHK比べをしており…少し経った後に刃が完全敗北を喫したようだ。

勝ったルナはその勢いでキュルケに『貴女を抱かせて』と迫るが、キュルケは『私のアソコはシンヤ専用なの！』と喚き散らしている。逆サイドでは落ち込んだ刃を慰める為か、孫堅と徐庶が刃を巻き込んでおっぱじめてしまっている。

「あのアホ共は…」

「気にしたら負けだ…じゃ、説明を始めるぞ」

言って涼輔は説明を始めた。

エヴァには『登校地獄』の他に『学園結界』と言う物が作用していた事。

この『学園結界』がエヴァの魔力を封じていた事。

先ほど『登校地獄』の呪いを斬り壊したが、その際誤って『学園結界』の…エヴァに作用している部分も、一緒に斬り壊してしまった事。

「学園結界はこの学園を統括する魔法使いが…電気系統を利用して張った物となっているんだ」

「電気系統…チッ！あのジジイか…だから私は年に2回、電気系統のシステムメンテナンスの日に該当する『大停電』の間だけ…魔力が開放出来るのか」

「で、この学園結界はその効能の有無を学園側が把握している可能性があるんだ」

学園結界の狙いは3つ。

- 1つ目は麻帆良内で発生する異常に対し、住民への状態誤認作用。
- 2つ目は麻帆良に侵入する外敵の感知作用。
- 3つ目が結界内に居る、特定人物の力の抑制作用。

「つまり効用3において、私は魔力を封じられているんだな？」

「そう…けどその効用3の、エヴァにだけ作用していた部分を俺達が斬り壊した」

「恐らく、この別荘から出た途端…貴女の魔力は結界管理者に感知され、事と次第によつては害と見なされ再封印…最悪の場合は排除ね」

「排除だ？ はっ…この私を誰だと思つてる？ ダーク・エヴァンジェル 闇の福音だぞ？

排除等されるはずが…いや、危ないのかも知れんのか」

エヴァ曰わくこの学園には、間違いなく最強ランクに位置する使い手が存在すると言う。

「麻帆良学園の学園長『このえ近衛 このえもん近右衛門』と『たかはた高畑・T・タカミチ』の2人は要注意だ」

近右衛門はこの麻帆良学園を治める学園長と言う肩書きの他、関東魔術協会の会長と言う肩書きも持っている。

会長の肩書きに相応しいだけの魔力と魔法を持つと、エヴァは語る。

「見た目は老いばれ…いや、ぬらりひょんだが」

そしてタカミチ。

ムンドウス・マギクス  
彼は20年前に、魔法世界で名を馳せた伝説の一団『赤き翼』に所属していた人物で…魔力を有してはいるが、詠唱が出来ないと言う弱点を持つ。

だがその弱点を補って余りあるのが、彼の武術『居合い拳』で…その破壊力は、有する魔力と気を融合した時…最大限に発揮されると言う。

「魔力と気…元来ならば反発し合い、決して交わらないこの2つを…タカミチは『咸卦法』と呼ばれる特殊技術で融合させ、居合い拳の破壊力を爆発的に上昇させる事が出来るんだ」

咸卦法により威力を増した居合い拳はそれこそ弾幕…しかも1発1発の威力が砲弾並かそれ以上、更にはその砲弾以上の威力を持つ剛拳が…凄まじい速度でマシンガンの如く連射されると言う。

「居あい拳…ポケットを鞘にした、拳による居合い抜きか」

「刀で言う抜刀速度は元より、納刀速度もアホみたいに速い…初見で情報無しなら確実、私でも詠唱が間に合わなければ打ち据えられて終わりだ」

「ふうん…」

タカミチと言う人物の強さをしみじみ語るエヴァだったが、神也以外の一同…特に綾子には反応が鈍かった。

「エヴァさん」

綾子はエヴァを呼び、両手をスカートのポケットに入れ…

「ん？」

エヴァが自身の方を向いた瞬間、その手を振るった。

—パァンッ—  
—パパパァンッ—

風船が破裂するような音と共に、空中で何かが粉碎して行く。  
見ればそれは涼輔が食べたフライドチキンの骨なのだが、それらは  
悉く木っ端微塵に粉碎していた。

「まさか…居合い拳か!？」

「故郷では<sup>ばっけんじゅつ</sup>抜拳術と呼んでましたが」

気が付けば涼輔がフライドチキンの骨を投げており、卓上のソレは  
残すところもう1本しかない。

「咸卦法、魔力と気…言葉からイメージするに、こんな感じでしよ  
うか…はっ!」

涼輔の手から最後の骨が宙に舞う。  
同時に、いやそれより速く…綾子の右手が魔力で、左手が気で覆わ  
れ…

—パシンッ—

柏手一つ、それらが融合…

—ブワッ!—

刹那、綾子の全身から凄まじいエネルギーが発せられる。

「…せいっ！」

—キュドッ—

ちようと真ん前へ落ちてきた骨に向かい、魔力と気を合成した状態での抜拳術が放たれる。

その一撃は音の壁にブチ当たった様な音を響かせ、宙を舞う骨を粉碎…いや、粉へと変える。

「…ふう」

パラパラと舞い散る骨の粉から身を引き、数歩下がったところで一礼する綾子。

その様子にエヴァは顔を真つ青にしていた。

「…霞<sup>しあ</sup>辺りが見てたら、嬉々として手合わせを挑んでくるでしょうね」

エヴァ自身、霞と言う人物がどんな人物なのかは知らないが…猛者と戦いたいと言う武芸者は、今世代においても未だに多い事を知っている。

例えばクラスメートの『古<sup>く</sup>菲<sup>ふ</sup>』や『長<sup>なが</sup>瀬<sup>せ</sup> 楓<sup>かえ</sup>』には手合わせ相手となるだろう。

とは言え実力的には一蹴されて終わりだろうが。

「まあお義<sup>にい</sup>兄様の居合の方がずっと速いのですが…ともかく、私達が相手をすれば結界管理者もそう簡単に優位には立てないでしょう」

そこへキュルケへの交渉に失敗し、若干項垂れたルナが…セイラの脇腹にしがみ付く形で戻ってきた。

「個人的には、エヴァの現魔力値を『学園結界』に誤認させる方が簡単だと思うけど」

「結界に魔力値を誤認？ 出来るのか？」

「僕達が協力すれば造作もないです…ああ、久しぶりに落ちましたよ…」

言って身じろぎをして、キュルケの胸から離れる神也。  
どうやら復活したらしい。

「おお神也、気が付いたか？」

「あ、エヴァさん…それ年齢詐称薬ですか？」

「うむ、キュルケから説明を聞いてるからな」

「すみません、僕の体質のせいで不快な思いをさせてしまつて…」

「体質ならば仕方ないさ…で？ 神也達が協力すれば造作もない…とは？」

言われて神也は、キュルケが背負っていたカスタムバッグから…1本の指輪を取り出した。

「涼輔さんと綾子さん、ルナさんにお聞きたいのですが」

「ん？」

「何でしょう？」

「何かしら？」

一同は神也の案を聞いて納得、エヴァは絶句した。  
絶句し、そして絶叫した。

「この場で魔法具を作り出して、それを身に着け結界を誤認させる  
だど！？」

### 3 時間目：解き放たれし闇の福音（後書き）

次話は拙作主人公組の紹介を入れる予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9755y/>

---

魔法先生ネギま！～麻帆良騒乱物語～

2011年11月29日15時56分発行